続・白糠のアイヌ語地名

茶路川筋のアイヌ語地名

第４回

○マカヨ（川）

「マカヨ」は、茶路小中学校の北側を流れるマカヨ川に由来するアイヌ語地名です。「マカヨ（フキノトウ）・タ（刈る）・ナイ（沢）」という意味があり、春になるとフキノトウで埋め尽くされ、それを刈り取る場所であることを示しています。

ちなみに、マカヨ1番地1にある茶路小中学校では、毎年度の学校経営計画を『マカヨの教育』と名付け、地域とのつながりを大切にした教育活動を展開しています。

松川橋とマカヨ川

■アイヌ民族とフキ

フキノトウはフキの花茎で、早春に出てきて花を咲かせ、その後あの大きな葉が伸びてきます。フキノトウも葉の茎も、春を代表する山菜としてよく食べられていますが、アイヌ民族も古くから食用、薬用として利用してきました。アイヌ語で葉のフキのことを「コロコニ」と言います。

食用にしたのはフキノトウの茎と葉の茎で、焼いて皮をむき汁の具にしました。また、葉の茎は漬物にしたり、乾燥させて冬場の食糧にしていました。

薬用としては、ケガをしたとき茎を生のまま噛んで傷につけたり、風邪には茎を煎じて飲んだようです。根も煎じて熱さましや解毒に使いました。麻しん（はしか）にも効いたと言われています。

（参考『アイヌ民族の有用植物』北海道立衛生研究所、『平取町内に伝わる薬用植物』貝澤美和子）

○アツタピラ

「アツタピラ」は、茶路川が茶路橋を過ぎたところで左に反れ、松川地区の西側を回り込むように大きくカーブしているところにある崖の名前です。

「アッ（オヒョウの樹皮）・タ（切る）・ピラ（崖）」という意味で、アイヌ民族伝統の衣服の材料となるオヒョウの木が生えている崖のことを言います。

オヒョウは、北海道に多く見られるニレ科の落葉樹です。高さ25㍍、太さ1㍍にもなり、現在では主に家具材として使われています。

さて、厚岸町の「アッケシ」も「アッ（オヒョウの樹皮）・ケ（はがす）・ウシ（いつもする）・イ（所）」に由来するという説があります。

言語学者の知里真志保博士は著書の中で、オヒョウの皮採りにちなんだ地名が北海道に多くあるのは、アイヌ生活における重要な行事の一つであったからで、皮採りのときには、木の神に酒や幣（ぬさ）（イナウ）を捧げ、木を裸にしないという意味で、皮の半分は残しておくと述べています。（参考『分類アイヌ語辞典　植物編』）

■樹皮衣「アットゥシ」

アイヌ民族の伝統的な衣服は、身近な材料を使って作られています。

材料別には、獣の皮を使った「獣皮衣」、植物の繊維を用いた「植物衣」、木綿を材料にした「木綿衣」に分けられ、植物衣の中でも樹木の皮を使って作られる「樹皮衣」は、木綿衣とともにアイヌ民族の代表的な衣服と言われています。

アットゥシ

樹皮衣は「アットゥシ」と呼ばれ、オヒョウの樹皮の内側の皮（内皮）からとった繊維を糸にし、それを織った布で仕立てられます。特にオヒョウの内皮は、柔らかく丈夫であることから適していたようです。

（参考「アイヌの歴史と文化Ⅱ『アイヌの衣服』（児玉マリ）」創堂舎）